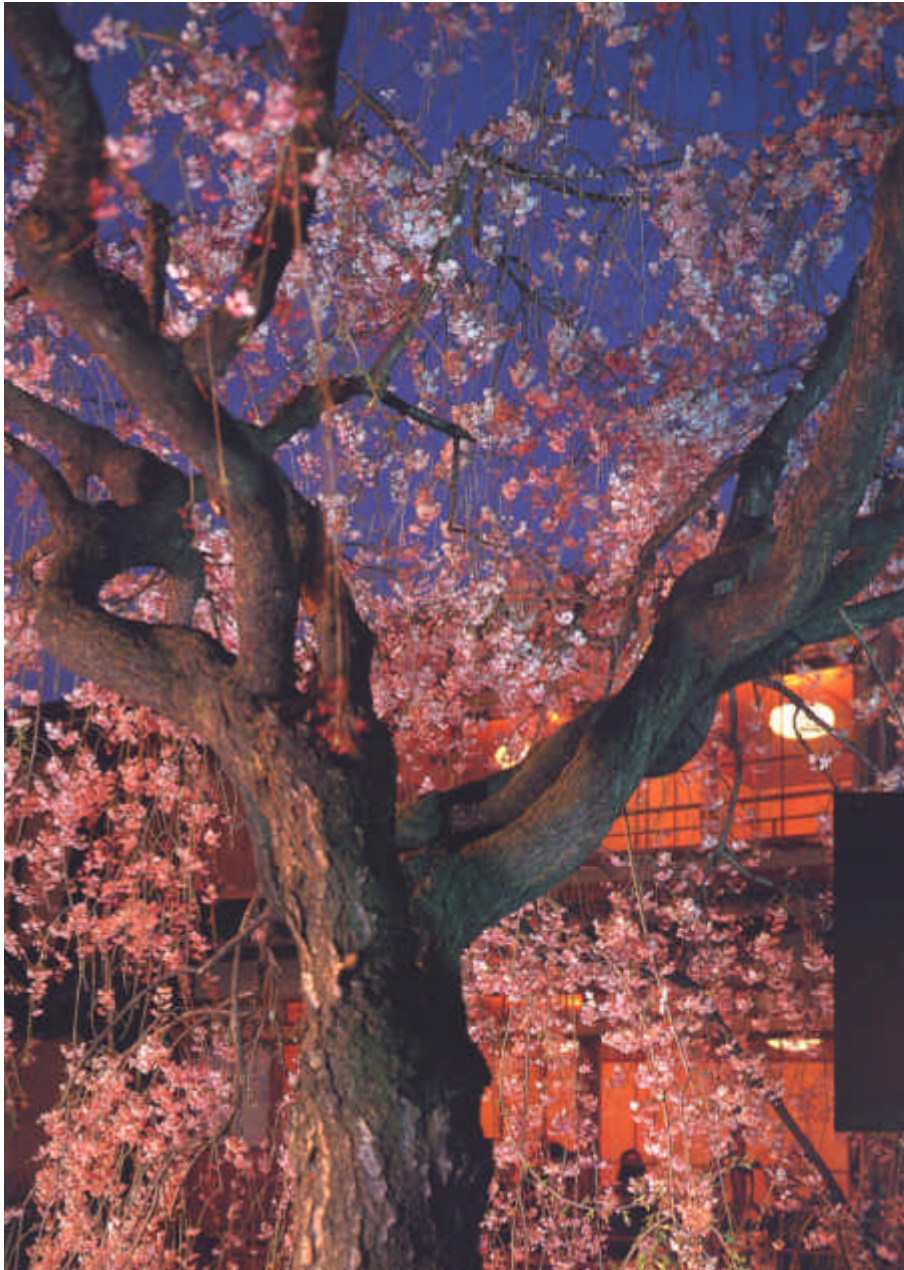




京の季語 春

平成十年三月三十日初版一刷発行

文	坪内稔典
写真	橋本健次
発行者	長澤浩三
発行所	光村推古書院株式会社
定価	¥1000E+ 税



春宵（しゅんしやう）【春の宵、宵の春、春の夕、春の暮】
夕暮れから夜の更けるまでの間が春宵。「春宵一刻値
千金」（蘇東坡）の甘美な情緒が満ちる時間だ。

公達（きんたち）に狐化けたり宵の春 与謝蕪村

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人
みなうつくしき 与謝野晶子



祇園町の提灯



京舞妓の粧い



おみくじと紅梅

はんなり

明るくはなやかなさまを言う京都言葉。「花にあり」「花なり」「はんなり」と変化した言葉だといふ。

桜が花の代名詞になるまでは、花と言えば梅の時代があった。はんなりの語源の花も梅の花だろう。春を告げる梅花の気品と明るさが「はんなり」。

しら梅や誰がむかしより垣の外
うめ散るや螺鈿こぼるる卓の上

与謝蕪村
与謝蕪村



壬生狂言（壬生寺）



壬生狂言（壬生寺）

壬生念仏（みぶねんぶつ）【壬生狂言】

中京区の壬生寺では、四月二十一日から二十九日まで、大念仏会が行われる。この期間中、境内の大念仏堂では壬生狂言が演じられる。口中で念仏を唱えながらの仮面劇。

つららかに妻のあくびや壬生念仏
鬼女の出に昼の月あり壬生狂言

日野草城
山尾玉藻